

## 第一部 シンポジウム

〈司会〉 では大変長らくお待たせをしました。定刻を多少過ぎましたが、只今から台湾問題シンポジウムを開催したいと思います。最初にこのシンポジウムを企画しました国際言語文化研究所と国際地域研究所の両代表からご挨拶を申し上げます。

### 西川長夫国際言語文化研究所長の挨拶

本日は、すでに師走に入って、皆さんお忙しいなかを、私どもの研究所の主催する「台湾問題シンポジウム」にお集まりいただきありがとうございます。

台湾に関するシンポジウムを開きたいということは、かなり前から考えていました。今日はここに台湾から4人のそれぞれの領域で大変活躍しておられる方々をお招きして、私たちの夢が叶いました。このうえない喜びです。始めに今日の講師の方々、台湾から来られた方々を紹介させていただきます。詳しいことはこの報告論集のなかに紹介がありますし、後で司会の方からもいろいろお話があると思いますが、とりあえず簡単な紹介をさせていただきます。一番向こうのほうから、これはもう国際関係学部の方をご存じの先生ですけれど、Wei-penn Chang 先生です。Chang 先生は長い間モントリオールで教えておられましたが、今はそこに書いてありますように台湾の淡江大学のヨーロッパ研究所の教授をしておられます。それから、そのお隣は楊碧川先生です。歴史家で、長い獄中生活の後に台湾と台湾人の歴史について数多くの書物を出しておられる在野の歴史家です。それから、そのお隣が大変有名な皆さんご存じの小説家の李昂先生です。フェミニストという言葉が適切なのかどうかわかりませんが、本日の第二部で、日本でも翻訳されている『夫殺し』をめぐる、「『夫殺し』とフェミニズム」というテーマでお話をうかがいます。それからそのお隣は、どう紹介したらいいでしょうか、やはり台湾の問題に深く関わってこられた清河雅孝先生です。京都産業大学で教えておられます。それから、そのお隣が朱約信さん、歌手・シンガーソングライターで、台湾では若手の有名な方です。ギターを持っています。今日は第二部のセカンドステージで、「ポピュラーソングで綴る台湾この百年」というテーマで、実演付きでお話を願います。とりあえず台湾から来られた先生方の紹介をさせていただきました。

それでは、第一部のプログラムに入らせていただくわけですが、始めに、このシンポジウムの趣旨について少しお話をさせていただきます。このシンポジウムの趣旨に

については、これは留学生の方々も参加していただいて大変ご苦勞かけたんですが、受付で受け取っていただいた「報告論集」のなかに、短いものと少し詳しいものと二種類のわれわれの考えたこのシンポジウムの趣旨が記されていますので、それをお読みいただきたいと思います。ここに記された文章のなかには、おそらく二つか三つの提案といますか、意見が含まれています。ここではそのことについてちょっとお話しさせていただきます。

第一点は、ここにもありますように、来る1995年は、もうすぐですが、日本が台湾に対する植民地統治を始めて、つまりアジアへの帝国主義的な侵略を始めて100年目にあたるということです。われわれはこの機会に改めてわれわれが属している日本という国の歴史的な過去を反省して、過酷な植民地支配に苦しんでこられた国の方々と新たにどういう関係を結ぶべきか。そういうことについて深く考えなければならない時期にきていると思います。それと同時に、来年は戦後50年になります。100年というのは、我々の父とか祖父母の時代、直接にはその世代の問題であったわけですが、今度は我々が直接に責任を取らなければならない時代だと思えます。そして、そのことに対しての深い反省が必要だと思えます。敗戦によって日本は植民地を手放したわけですが、しかし、連合軍つまりアメリカ軍の占領下であって、国家の主権を失うとともに、アメリカの支配下にあるということをお口実にして、自分で考える、つまり、歴史に対して主体的に反省し責任を取るといことも放棄して、忘れてしまった側面があると思えます。そして、そのことは日本人に、思想的な退廃をもたらしたのではないかと。とりわけ台湾に関してあまり深く考えてこなかった。台湾は私たち日本人の思考の盲点ではなかったかと思えます。韓国とか中国については、まだいろいろな考え、反省する機会があったわけですが、台湾について発言すること、考えることは一種のタブーになっていたと思えます。それで、そのタブーを破りたい、タブーを破ろうというのが、今回の我々のシンポジウムのひとつの試みであるというふうに私は考えています。

それから、第二点が、台湾について考えることがわれわれのタブーであったのは、大陸と台湾との間に政治的にねじれた関係があったからだと思えます。皆さんご存じのように、大陸の政府は台湾は自国の一部であると、それから台湾の政府は、実質は別として、少なくとも国際法的には自分たちは大陸をもふくめたこの地域の正当な支配者であると、そういう主張をしております。そういう政治的な対立のなかで、政府あるいは国家の主張が忘れていたのは、その土地に住んでいる人びと、台湾の住民の生活と文化ではなかったかと思えます。こうした国家のねじれた、なんといいま

か、国際法的にねじれた関係のなかで、政治的に大変困難な状況のなかで暮らしてこられた台湾の人びとは、そのなかで独自の経済的な活動をし、独自の生活文化を築き上げてきました。そういう困難な状況のなかでつくられ、育て上げられてきた感受性とか認識とか、そういうものは、われわれ日本の社会のなかで安穩につくられてきたものとは大変違うのではないのか。現代の国民国家の厳しい矛盾のなかで生きてこられた台湾の方々の認識とか感情、感性には、ひょっとしたらそういう国民国家の枠を超える発想や思考の方法があるのかもしれない。そういうことをシンポジウムの立案者は考えました。

台湾の現代化という問題も、単に経済的な発展の問題であるとか、あるいはまた政治的な民主化がどこまで進むかという、それはそれで大変重要な問題ですが、そこにとどまらずに、もう少し未来に関わって、21世紀の人類の未来に関わる問題につながっているのではないか。それをわれわれは、国民国家を、あるいは国民国家の時代をいかに越えるか、というような設問の形にしてみました。そういった表現が良いか悪いかも含めて、厳しい議論がここで展開されることを期待しています。

いずれにせよ、これが一番大切なことだと思いますが、私たちはこのタブーを破り、新しい世界を考えるにあたって、まず台湾に住んでいる方々の、あるいは台湾に深く関わってこられた方々の意見を直接に聞くことから始めたいと思います。最後にここにお集まりの皆様、このシンポジウムのために遠方から駆けつけてきていただいた方々、あるいは、このシンポジウムの組織のために尽力していただいた方々にあらためて感謝の気持ちを表すことで挨拶を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

《司会》 只今は国際言語文化研究所の西川所長の挨拶でした。代わりまして、国際地域研究所の関寛治所長が所用のため、佐藤誠専任研究員が、代わってご挨拶を申し上げます。

### 佐藤誠国際地域研究所専任研究員の挨拶

皆さん、ようこそお出でくださいました。今日は国際地域研究所所長の関が不在でありますので、私、専任研究員の国際関係学部佐藤がご挨拶申し上げます。

このシンポジウムには、われわれは三つくらいの意義があると考えております。一つは、この地域研究所と言語文化研究所の共同の催しが、先月のヨーロッパ統合につ

いて開催されたということで、われわれは共同の流れを更に発展していきたいと考えております。もう一つは、地域研究という点で、やはり一つの地域について総合的に、今回は、例えば、歴史、経済、音楽、文学というような多面的な側面から研究されるという点であります。しかし、以上のような点はいずれも、ある意味では学内的な事情でして、重要なことは台湾問題のそのものにあります。

先程、西川先生のほうからお話がありましたように、今年は日清戦争と呼ばれる日中間の戦争が起きて100年目、すなわち日本の台湾植民地化のきっかけとなった戦争から100年目であります。しかし同時に、この戦争が、日本と中国、当時の清国の、朝鮮半島をめぐる領有、支配の争いから起きたということも一つの側面でありまして、今年はまだ、日本で“東学党の乱”と呼ばれる農民戦争が起きてから100年目に当たります。また今年には日本の台湾出兵から120年目でありますけれど、120年前の台湾出兵そのものの一つのきっかけ、あるいは口実となったのは、ご存じのとおり沖縄の問題でした。またこの120年目という点からすれば、今年はずいぶん琉球処分のおかげとなった大久保の上申書が出されてから120年目でもあるわけです。だが同時に、私は次のようなことも思い浮かべます。私的なことを申し上げますと、私は東京の池袋というところに生まれました。そこには現在サンシャインビルというのが建っております。ここは元々刑務所でありました。ここでちょうど50年前、尾崎秀実が処刑されました。この尾崎秀実は、極めて特異な形で日本の侵略をくい止めようと生命をかけたわけでありまして、この尾崎が台湾で生まれた。台湾で生まれ育ち、日本の植民地支配に強い憤りを持っていたということ。また、この尾崎の父親が台湾の行政に大きな影響力を発揮した後藤新平の懐刀であった。こういうことを私は思い浮かべます。

すなわち、今年には日本、沖縄、台湾、中国、朝鮮半島という東アジアを結ぶ重要な地域において国家と民族、民衆と国家、あるいは nation state そのもののあり方について考えるひとつの重要な年であるというように私は考える。その意味で今回のシンポジウムがその一つのきっかけになるのではないかとこのように期待しております。以上簡単にご挨拶申し上げます、特に台湾からお出でくださったゲストの皆さんに感謝を申し上げます。とりわけ Chang 先生には、かつての同僚の一人として感謝と歓迎の意を表したいと思っております。どうもありがとうございました。

《司会》 それでは只今からシンポジウム第一部「台湾の現代化をめぐる」に移らせていただきます。

第一部には、三人の報告者の方々と、デスクサントといたしまして、六人のゲストをお迎えしております。

それでは、最初に京都産業大学法学部で民法を研究しておられ、長く台湾問題に関わってこられてきた清河雅孝先生から「台湾現代化の歴史及び今日に於ける基本問題」と題してお話をいただきます。

## 第一報告

### 台湾現代化の歴史及び今日に於ける基本問題

清 河 雅 孝

只今ご紹介に預かりました清河でございます。このシンポジウムの開催にあたりテーマをいただき、立命館大学の関係者に一言感謝を申し上げます。

本題に入りますが、「台湾現代化の歴史及び今日に於ける基本問題」について、若干、個人の所見を申し上げます。私はいつも台湾の歴史の展開はいったいどのようなものであったかについて常に考えてきましたが、未だに結論はでておりません。ただ、台湾の歴史の展開は、世界の歴史の流れのなかで、強制と偶然の歴史的展開ではないかと考えております。そして、このような歴史、強制と偶然の展開につきまして400年も経っておりますので、少なくとも台湾の人は、一つの人生の哲学、あるいは達観に達しているのではないかと思います。すなわち、強制と偶然の歴史でありながら、いかにこの強制と偶然を生かして自分を発展させるかということでもあります。従いまして、受けた強制あるいは偶然性につきましては口に出さない。あるいは恨みとして口から出すことでそれを解消することなく、深く心のなかに深化させて、そして一つの力にしてきたのではないかと思います。台湾の人々は決して歴史に対して記憶力を持っていないのではなく、持ってはいますが、その対処の仕方がそのほかの国とは異なっているのではないかと私は思っております。

第二ですが、このような強制と偶然の展開ですが、長く自己選択といいますが、あるいはいわゆる主体性を確立することができない、あるいは与えられていないという歴史でした。ですから、現時点におきましても、その自己選択の制限に対しては非常に執着、主張する。今日は12月3日であります。実は台湾の歴史におきまして非常に大きな日であります。なぜかという、彼らが自分の意志・判断にもとづいて、彼らの省長、あるいは彼らの市長を選ぶ日であります。これは台湾の400年の歴史のなか